



教育とDX革命 ～熟達に必要なのは効率的な訓練か

■ 今井 むつみ



私は自分が芸術を理解しているとは思わないが、芸術は好きだ。認知科学の一研究者として、一流の芸術家と世間にみなされる人たちは、どのようにその道を歩み始め、どのような過程で一流になったのだろうかを考えてきた。翻って、学校の勉強に躓いてしまっている子どもたちはどのように知識を習得しようとしているのか、なぜ学校で教科単元の学びに大きな困難を感じるのだろうかも考えてきた。

この10年ほどで、学校での学びの景色が変わってきた。DX革命という言葉が頻りに聞く。学校での学びにデジタル教材を取り入れ、教育を効率化しようという動きである。最近はこれに生成AIが加わって、教育のデジタル化にますます拍車がかかっている。現代社会では「効率化」は最も重要なキーワードである。学校も役所も企業も効率化を迫られ、効率化をしないと生き残れないと言われる。事務作業の効率化なら分かる。しかし教育と学びになぜ効率化がそれほど大事なのかという議論はあまり聞かない。そもそも効率的な学習とは何なのだろうか？ 短い時間で、たくさんの教材に触れ、練習問題をカバーし、教科書に書かれていることを手際よく覚えていくことだろうか？

各分野で一流と目される達人たちは、効率的な学習をしたから一流になったのだろうか？ 一流の芸術家とはどういう人たちか。熟達者の前提条件はその分野に必要な技量に秀でていることだ。しかし技術が高いだけでは一流にはなれない。一流の人は標準的な規範から逸脱した独自の味を持っている。それはどうい

■ 今井 むつみ
(一社) 今井むつみ教育研究所 所長／
慶應義塾大学 名誉教授

慶應義塾大学名誉教授。ノースウェスタン大学で博士号取得後、慶應義塾大学教授などを歴任。現在は今井むつみ教育研究所所長。専門は認知科学、言語心理学等。最新刊に『アダクション英語学習法』、ほか著書多数。



教育から生まれるのだろうか？

先日『カルテットという名の青春』というドキュメンタリー映画を観た。主人公は4人の若き弦楽器奏者たち。幼いころからその才能を注目された4人の神童たちがカルテットを組み、世界に打って出た。しかし意気揚々と挑んだ国際コンクールでは第一次審査を通過できず、コンペティションの場に立つこともできなかった。4人は自分が、そしてカルテットが目指すべき音楽を見つけるためにそれぞれ別々にヨーロッパに修行に出かける。彼ら一人ひとりが孤独に向き合いながら音楽に向き合う日々を映画は淡々と映し出している。ヨーロッパの指導者たちはそろって指摘する。君たちは技術的には申し分ない。できていないのは自分のすべてをさらけ出すことだと。結成当初、楽譜に忠実にミスなく完璧な調和を演奏に求めていたリーダーは気づく。名曲はすでに美しい。そのまま美しい曲をどう美しく演奏するかが大事なのではなく、どうしたら自分たちにしかできない演奏をするかが求められるのだ。

熟達をすることと効率的に学ぶことは反対の極にあることに気づかされた映画であった。DXによる教育の「効率化」が、子どもが短時間で多くの知識を覚えられるようにすることだとしたら、次世代にはどの分野においても一流の熟達者はいなくなるのではないだろうか。